

今度生まれてもやっぱり日本人？

広島大学工学部 駒口健治

筆者は、昨年スウェーデンの Linköping 大学に 4 カ月余り滞在した。Linköping は、首都ストックホルムから 200 km 程南に位置し、古い街並みと近代的な大学、空軍の施設が共存する町である。

スウェーデンについて、日本人が一番に思い浮かべることは、北欧、白夜、キルナ鉱山、ノーベル賞、日光浴、サウナ、長寿国、福祉国家等々であろうか。筆者にとって、スウェーデンとは“おとな”ということ深く考えさせられた国である。

今から 3 年前、筆者の所属する研究室に長期滞在していたひとりのスウェーデン人が、日本人は数 km を移動するとき、なぜ自転車ではなく自家用車を使うのか？ と尋ねてきた。彼は、納豆や寿司、日本酒を好む大の親日家であったが、なぜ日本人が自家用車を安易に利用したがるのか彼には全く理解できないようだった。最近、地方大学では学生ですら自家用車で通学することが当たり前になっている。自転車より車の方が楽だから？ 筆者は、その質問にすぐに返答できなかった。

スウェーデンに住んではじめて、彼の疑問は無理もないことが分かった。Linköping 大学では学生や職員は、積極的に自転車を利用して、朝の通学時、自転車に乗るのは何年ぶりかという危なげな運転の筆者の横を、女子大生が透き通るような金髪をなびかせて、ビュンビュンと次々に追い抜いていった。中心街の至る所に駐輪場、国土全域に自転車道が整備され、本屋さんには自転車道専用地図が並んでいた。仲睦まじくサイクリングする老夫婦もめずらしくない。しかし、スウェーデンには国産車 (VOLVO) があり、彼らにとって自家用車は最も便利な移動手段のはずである。それでも彼らは、一番の交通手段として自転車を利用して、

スウェーデン人は平和の大切さを最もよく知ってい

る民族であるといわれる。問題を自らの力で解決し、さらに豊かな生活を目指して新しい進路を模索している。だからこそ 180 年間余りも中立を維持し続け、世界で最も女性が輝いている国、視察団の訪問が絶えない高福祉社会を実現させた。そのため、日本人にとってギョッとするようなことが現実になっている。例えば、消費税は 20%、女性は皆仕事に就いているので専業主婦はいない。家事と育児は、夫婦で同等に負担するのが原則で、男性にも育児休暇がある。一般の人は皆、スウェーデン語以外に英語を流暢に話すことができる。これらのことはほんの一部である。

平等と平和を最優先に考える彼らの姿勢は、日本では想像できない厳しい気候風土に根ざしたものかもしれない。スウェーデンの冬は半端ではない。零下 20 度以下、鉛色の空のもと一日のうち明るいのは僅か数時間である。

そんなスウェーデン人と比べると、日本人は“こども”と言わざるを得ない。季節を問わず新鮮な食べ物が溢れ、気候は温暖、太陽は一年中照りつける。石油が買える間は使わなくちゃ損だ。大気汚染？ 自然破壊？ そのころには私は生きてないから関係ない。きっと、誰かが何かいい方法を考えてくれる。日本には、スウェーデンとは異なる事情があることは理解できるが、スウェーデン人に見せたくない残念な行動をとる人が多い。徒歩で十分な距離さえ自家用車に乗って、豊かになりましたな、便利になりましたぞ、と満足することは、結局、地球に住む“ひと”として真に独立していないと感じる。

筆者は、1 年間、原子トンネル反応研究グループでお世話になりました。センター関係皆様のご協力のもと、理想的な環境で仕事をさせていただきました。ありがとうございました。